

和辻哲郎

漱石の人物

漱石の人物

私が漱石と直接に接触したのは、漱石晩年の満三個年
の間だけである。しかしそのお蔭で私は今でも生きた漱
石を身近かに感じる事ができる。漱石はその遺した全
著作よりも大きい人物であった。その人物にいくらかで
も触れ得たことを私は今でも幸福に感じている。

初めて早稲田南町の漱石山房を訪れたのは、大正二年
の十一月ごろ、天気の良い木曜日の午後であったと思う。
牛込柳町の電車停留場から、矢来下の方へ通じる広い通

りを三四町行くと、左側に、自動車がいれるかどうかと思われるくらいの狭い横町があつて、先は少しだらだら坂になっていた。その坂を一町ほどのぼりつめた右側が漱石山房であつた。門をはいると右手に庭の植込みが見え、突き当りが玄関であつたが、玄関からは右へも左へも廊下が通じていて、左の廊下は茶の間の前へ出、右の廊下は書齋と客間の前へ出るようになっていた。ところで、この書齋と客間の部分は、和洋折衷といつてもよほど風変わりな建て方で、私は他に似寄つた例を知らない。まず廊下であるが、板の張り方は日本風でありながら、

外側にペンキ塗りの勾欄がついていて、すぐ庭へ下りることができないようになっていた。そうしてこういう廊下に南と東と北とを取り巻かれた書斎と客間は、廊下に向って西洋風の扉や窓がついており、あとは壁に囲まれていた。だからガラス戸が引き込めてあると、廊下は露台のような感じになっていた。しかしそのガラス戸は、全然日本風の引き戸で、勾欄の外側へちょうど雨戸のように繰り出すことになっていたから、冬はこの廊下がある・ルームのようになったであろう。漱石の作品にある「硝子戸の中」はそういう仕掛けのものであった。そこ

で廊下から西洋風の戸口を通って書斎へはいると、そこは板の間で、もとは西洋風の家具が置いてあったのかもしれないが、漱石は椅子とか卓子とか書き物机とかのような西洋家具を置かず、中央よりやや西寄りのところに絨毯を敷いて、そこに小さい紫檀の机を据え、坐って仕事をしていたらしい。室の周囲には書棚が並んでおり、室の中にもいろいろなもの積み重ねてあって、紫檀の机から向うへは入る余地がないほどであった。客間はこの書斎の西側に続いているので、仕切りは引き戸になっていたと思うが、それはたいてい開け放してあって、一間

のように続いていった。客間の方は畳敷で、書斎の板の間との間には一寸くらいの段がついていたはずである。この客間にも、壁のところには書棚が置いてあった。

私が女中に案内されて客間に通った時には、漱石はもうちやんとそこに坐っていた。書斎と反対の側の中央に入口があつて、その前が主人の座であつた。私はそれと向き合つた席に書斎をうしろにして坐つた。外には客はなかつた。

この最初の訪問のときに漱石とどういふ話をしたかはほとんど覚えていないが、しかし書斎へはいつて最初に

目についた漱石の姿だけは、はっきり心に残っている。漱石は座ぶとんの上にきちんと坐っていた。和服を着て坐っている漱石の姿を見たのはこれが最初である。客がはいっていてもあまり体を動かさなかった。その体つきはきりつと締って見えた。三年前の大患以後、病気がつきで、この年にも「行人」の執筆を一時中絶したほどであったが、いっこう病人らしくなく、むしろ精悍せいかんな体つきに見えた。どこにも隙のない感じであった。漱石の旧友が訪ねて行って、同じようにして迎えられたとき、「いやに威張っているじゃないか」と言ったという話を、

その後聞いたことがあるが、人によるとこの態度を気取りと受取ったかもしれない。しかし私はどこにもポーズのあとを感じなかった。因襲的な礼儀をぬきにして、いきなり漱石に会えたような気持がした。たぶんこの時の印象が強かったせいであろう。漱石の姿を思い浮べるときには、いつもこのきちんと坐った姿が出てくる。実際またこの後にも、たいていは坐った漱石に接していた。だから一年近く経ってから、歩いている漱石を見ていかにもよぼよぼしているように感じられて、ひどく驚いたことがある、確かザルコリの音楽会が帝国ホテルで催お

されたときで、玄関をはいってゆくと、十歩ほど先をコツコツ歩いてゆく漱石のうしろ姿が見えたのであった。それ見て私はすぐに漱石の大患を思い出した。それは決して精悍な体つきではなかった。

初めて漱石と対座しても、私はそう窮屈には感じなかったように思う。応対は非常に柔かで、気置きなく話せるように仕向けられた。秋の日は暮れが早いので、やがて辞し去ろうとすると、「まあ飯を食ってゆっくりしていたまえ、そのうちいつもの連中がやってくるだろう」と言っぴきとめられた。膳が出ると、夫人が漱石と私

との間に坐って給仕をしてくれた。夫人は当時三十六歳で、私の母親よりは十歳年下であったが、その時にはなんとなく母親に似ているように感じた。体や顔の太り具合が似ていたのかもしれない。かすかにほほえみを浮かべながら、無口で、静かに控えておられた。当時はまだ「道草」も書かれておらず、いわんや夫人の『漱石の思ひ出』などは想像もできなかつたころであるから、漱石と夫人との間のいざこざなどは、全然念頭になかつた。「吾輩は猫である」のなかに描かれている苦沙弥先生夫妻の間柄は、決して陰惨な印象を与えはしない。作者はむしろ

苦沙弥夫人をいつくしみながら描いている。だから私は漱石夫妻の仲が悪いなどということも思ってもみなかった。実際またこの日の夫人は貞淑な夫人に見えた。

食事をしながら、漱石は志賀直哉君の噂をした。確かそのころ、漱石は志賀君に「朝日新聞」へ続きものを書くことを頼んだのであったが、志賀君は、気が進まなかったのだったか、あるいは取りかかってみて思うようにゆかなかったのだったか、とにかくそれをことわるために漱石を訪ねた。それが二三日前の出来事であった。そ

の時のことを漱石は話したのである。その話のなかに、「志賀君もなかなか神経質だね」という言葉のあったことを、私はぼんやり覚えている。

食事がすんでしばらくすると、ぼつぼつ若い連中が集まりはじめた。木曜日の晩の集まりは、そのころにはもう六七年も続いてきているので、初めとはよほど顔ぶれが違ってきていたであろうが、その晩集まったのは、古顔では森田草平、鈴木三重吉、小宮豊隆、野上豊一郎、松根東洋城など、若いほうでは赤木桁平、内田百閒、林原耕三、松浦嘉一などの諸君であつたように思う。客間

はたぶん十畳であつたらうが、書齋の側だけには並び切れず、窓のある左右の壁の方へも折れまがつて、半円形に漱石を取り巻いて坐つた。客がおおぜいになつても漱石の態度は少しも変らなかつた。若い連中に好きなように喋舌しゃべらせておいて、時々受け答えをするくらいのものであつた。特に好くしゃべつたのは赤木桁平で、当時の政界の内幕話などを甲高い調子で弁じ立てた。どこから仕入れてきたのか、私たちの知らないことが多かつた。がほかの人たちが話題にするのは、当時の文芸の作品とか美術とか学問上の著作とかの評判であつた。漱石はそ

ういう作品の理解や批判の力においても非常にすぐれていたと思う。若い連中にはどうしても時勢に流され、流行に感染する傾向があったが、漱石は決してそれに迎合しようとはせず、また流行するものに対して常に反感を持つというわけでもなく、自分の体験に即して、よいものはよいもの、よくないものはよくないものと、はつきり自分の意見を言った。森田、鈴木、小宮など古顔の連中は、ともすれば先生は頭が古いか、時勢おくれだとか言って喰ってかかったが、漱石は別に勢い込んで反駁するでもなく、言いたいままに言わせておくという態度

であった。だからこの集まりは、むしろ若い連中が気炎をあげる会のようになっていたのである。しかし後になつておいおいに解つてきたことであるが、漱石に楯をついていた先輩の連中でも、皆それぞれに漱石に甘える気持を持っていた。それを漱石は心得ており、気炎をあげる連中は自分で気付かずにいたのだと思う。

この木曜会の気分は私には非常に快く感じられた。それでこの後には時々、たぶん月に一度か二度くらいは出席するようになった。

漱石を核とするこの若い連中の集まりは、フランスで

いうサロンのようなものになっていた。木曜日の晩には、そこへ行きさえすれば、楽しい知的饗宴にあずかることができたのである。がそこにはなおサロン以上のものがあつたかもしれない。人々は漱石に対する敬愛によつて集まっているのではあるが、しかしこの敬愛の共同はやがて友愛的な結合を媒介することになる。人々は他の場合にはそこまで達し得なかつたような親しみを、漱石のお蔭で互に感じ合うようになる。したがつてこの集まりは友情の交響樂のようなふうにもなつていたのである。漱石とおのれとの直接の人格的交渉を欲した人は、この

集まりでは不満足であったかもしれない。寺田寅彦などは、別の日に一人だけで漱石に逢っていたようである。少くとも私が顔を出すようになってから、木曜会で寅彦に逢ったことはなかった。また漱石の古い友人たちも、木曜日にはあまり顔を見せなかった。私の記憶に残っているのは、ただ一つ、畔柳芥舟が何かの用談に来ていたくらいのものである。

大正三年ごろの木曜会は、初期とはだいぶ様子が違ってきていたのであると思うが、私にはつきりと目についたのは、集まる連中のなかの断層であった。古顔の連

中は一高や大学で漱石に教わった人たちであるが、その中で大学の卒業年度の最も後あとなのは安倍能成君であつて、そのあとはずっと途絶えていた。安倍君と同じ組には魚住影雄、小山輛絵、宮本和吉、伊藤吉之助、宇井伯寿、高橋穰、市河三喜、亀井高孝などの諸君がいたが、安倍君のほかには漱石に近づいた人はなく、そのあと、私の前後の三四年の間の知友たちの間にも、一人もなかった。木曜会で初めて近づきになった赤木桁平、内田百閒、林原耕三、松浦嘉一などの諸君は、皆まだ大学生であつた。また古顔の連中は、鈴木三重吉のほかは皆一高

出であつたが、若い大学生では赤木、内田両君が六高、松浦君が八高出であつた。だから私はちよつどこの断層の真中にいたことになる。芥川竜之介の連中が木曜会を賑わすようになったのは、さらに二年の後、大正五年のことである。

古い連中と新らしい連中との間には、年齢からいっても六七年、あるいは十年に近い間隙があつたし、また漱石との交わりの歴史も違つていた。古い連中は相当露骨に反抗的態度を見せたが、新らしい連中にはそういうこととはできなかつたし、またしようとする気持もなかつた。

しかし大正三年のころには、そういう断層のために何か不愉快な感情が起るといふことは、全然なかつたように思う。これは私が鈍感であつたせいかもしれぬが、とにかく私自身は、古い連中が圧制的だと感じたこともなかつたし、また漱石に楯を突く態度を怪しからぬと思つたこともない。初めのうちは、弟子たちが漱石に対して無遠慮であることから、非常に自由な雰囲気を感じたし、やがてそのうちに、前にいったような弟子たちの甘えに気づいて、それを諧謔の調子で軽くいなしている漱石の態度に感服したのである。楯を突いていた連中でも、た

まに漱石から真面目なことを一言言われると、ひどく骨身に徹して感じたようであった。断層のためにいくぶん弟子たちの間に感情のこだわりができたのは、芥川の連中が加わるようになってからではないかと思う。そのころ私は鵜沼に住んでいた関係で、あまりたびたび木曜会には顔を出さなかったし、またたまに訪れていった時にはその連中が来ていないというわけで、漱石生前には一度も同座しなかった。したがってそういうことに気付いたのは漱石の死後である。

木曜会で接した漱石は、良識に富んだ、穏やかな、円熟した紳士であった。癩癩を起したり、気ちがいじみたことをするようなところは、全然見えなかった。諧謔で相手の言草をひっくり返えすというような機鋒はなかなか鋭どかったが、しかし相手の痛いところへ突き込んでゆくというような、辛辣なところは少しもなかった。むしろ相手の心持をいたわり、痛いところを避けるような心遣いを、行届いてする人であった。だから私たちは非常に暖かい感じを受けた。しかし漱石は、そういう心持や心遣いを言葉に現わしてくどくどと述べ合うというよ

うなことは、非常に嫌いであつたように思われる。手紙ではそういうこともどしどし書くし、また人からもそういう手紙を盛んに受取つたであらうが、面と向つて話し合うときには、できるだけ淡泊に、感情をあらわに現わさずに、互に相手の心持を察し合つて黙々のうちに理解し合うことを望んでいたように見えた。これはあるいは漱石に限らず私たちの前の世代の人々に通有な傾向であつたかもしれない。私の父親などもそういうふうであつた。私は父親から愛情を現わす言葉などを一度も聞いたことはない。言葉だけを証拠とすれば、父親には愛がな

かったということになるが、そうでないことを私はよく理解していた。叱りつける言葉の中にだって愛は感じられるのである。しかしそういう態度は、親子の愛情などを何のこだわりもなしにあけすけに露出させる態度と、はつきり違っている。昔の日本の風習には、感情の表現にブレーキをかけるという特徴があったと思う。その点で漱石は前の世代の人であった。それだけに漱石は、言葉に現わさずとも心が通じ合うということ、すなわち昔の人のいう「気働らき」を求めていたと思う。そういう漱石が、毎週自分のところに集まってくる十人くらいの

若い連中、——それは毎週少しずつ顔ぶれが変るのであるから、全体としては数十人あつたであろうが——そういう連中の敬愛に応え、それぞれに暖かい感じを与えていたということは、並々ならぬ精力の消費であつたはずである。もちろん漱石は客を好む性たちであつて、いやいやそうしていたのではないであらうが、しかしそれは客との応対によつて精力を使い減らすということを防ぎ得るものではない。客が十人も来れば台所の方では相当に手がかかる。しかし客と応対する主人の精神的な働らきもそれに劣るものではない。木曜会に時々顔を出したころ

の私は、そんなことをまるで考えてもみなかったが、後に漱石の家庭の事情をいろいろと知るに及んで、その点に思い及ばざるを得なかったのである。日本で珍らしいサロンを十年以上開き続けていたということは、決して犠牲なしに行われ得たことではなかった。漱石は多くの若い連中に対してほとんど父親のような役目をつとめ尽したが、そのかわり自分の子供たちからはほとんど父親としては迎えられなかった。これは家庭の悲劇である、漱石のサロンにはこの悲痛の裏打ちがあったのである。

このことにはつきりと気づいたのは、漱石の死後十年

のころに、ベルリンで夏目純一君に逢ったときである。純一君は漱石が朝日新聞に入社したころ生れた子で、漱石の没したときにはまだ満十歳にはなっていなかった。木曜会で集まっている席へ、パジャマに着かえた愛らしい姿で、お休みなさいを言いに来たこともある。私は直接馴染になっっていたわけではなく、漱石の没後にも、一時家を出ていたころに、九日会の日には玄関先で見かけたくらいのものであった。だからベルリンの日本人クラブで、二十歳の青年になっている純一君から声をかけられたときには、初めは誰か解らなかつた。名乗られて顔を

眺めると、一高の廊下で時々見かけたころの漱石の面ざしが、非常にはつきり出ているように思えた。それから時々往来するようになり、さそわれていっしょにテニスをやりに行ったりなどしたが、似ているのは面ざしだけでなく、性質や気質のうえにもかなり濃厚に父親似が感ぜられた。当時ベルリンで逢う日本人のうちでは、いちばん傑出した人物であつたかもしれぬ。しかしまだ若いうえに、釣合のとれないチグハグなところがあつた。それは当人も気づいていて、「おれは日本語の丁寧な言葉つてもものを一つも知らないんだよ。だから日本から来

たヘル・ドクトルの連中に初めて逢って口をきくと、みんな変な顔をするんだ」と言っていたことがある。この純一君と話しているうちに、漱石の話がたびたび出たが、純一君は漱石を癩癩持の気ちがいじみた男としてしか記憶していないなかった。いくら私が、そうではない、漱石は良識に富んだ、穏やかな、円熟した紳士であったと説明しても、純一君は承知しなかった。子供のころ、まるで理由なしになぐられたり、怒鳴られたりした話を、いくつでも持ち出して、反駁するばかりであった。そこにはむしろ父親に対する憎悪さえも感じられた。それで私は

はっと気づいたのである。十歳にならない子供に、創作家たる父親の痼癢の起るわけが解るはずはない。創作家でなくとも父親は、しばしば子供に折檻せっかんを加える。子供のしつけのうえで折檻は必要だと考えている人さえある。それは愛の行為であるから、子供の心に憎悪を植える。つけるはずのものではない。作家の場合には、精神的疲労のために、そういう折檻が痼癢の爆発の形で現われやすいであろう。しかしその欠点は母親が適当に補うことができない。純一君の場合は、母親がこの緩和につとめないで、むしろ父親の痼癢に対する反感を煽ったのでは

なかろうか。そのために、年とともに消えてゆくはずの折檻の記憶が、逆に固まって、憎悪の形をとるに至ったのではなかろうか。そうだとすれば、漱石夫妻の間のいざこざが、こういう形に残ったともいえるのである。

このことに気づいたとき私は、「道草」に描いてある夫婦生活の破綻を再び意味深く反省してみる気持になった。あの小説の主人公も細君も、決して悪い人ではない。しかしいずれも我が強く、素直に理解し合い、いたわり合おうとはしない。二人の間にやさしい愛情がないわけでもないのに、細君は夫を「気違いじみた癩癩持」に仕

上げ、夫は細君を従順でない「しぶとい女」に仕上げてゆく。漱石はこの作を書いた時より十年ほど前、「吾輩は猫である」を書きだす前後の自分の生活をこの作で書いたといわれているが、しかし作者としての漱石は作の主人公やその細君を一步上から憐れみながら、客観的に批判して書いている。漱石の心境はもはや同じところに留まっていたのではない。しかし漱石の家庭生活がその心境と同じように一步高いところへ開けていっていたかどうかは疑わしい。夫人が素直に漱石について歩いていれば、あるいは漱石がその精力を家庭のほうへ傾けてい

れば、たぶんそうになっていたであろう。しかしこの期間の生活の痕跡を一身に受けている純一君は、明かにその反証を見せてくれたのである。「道草」に書かれた時代よりも後に生れた純一君は、父親を「気違いじみた癩癩持」として心に烙きつけていた。それは容易に消すことができないほど強い印象であった。私はそこに十歳以前の子供に対する母親の影響を見たのである。

これは私が漱石に接しはじめてから後にも亘っている出来事である。だから私は、漱石の明るいサロンが、家庭の悲劇の犠牲において作り出されていた、と感ぜざる

を得ないのである。ああいうサロンの空気は、すでに「吾輩は猫である」のなかにも見出すことができる。漱石はそこでは妻子に見せるとは異なった面を見せていた。何十人もの若い人たちに父親のような愛を注ぎかけた。そのための精力の消費が、夫として、あるいは父親としての漱石の態度に、マイナスとして現われるということはある。あり得たのである。漱石を気違いじみた癩癩持と感ずることは、夫人や子供たちの側からは、それ相応に理由のあることであろう。漱石に対する理解や同情がありさえすれば、問題をそこまでこじらさなくてもすんだである。

うとはいえる。しかしこれは夫人や子供たちに漱石と同程度の理解力や識見を要求することにほかならない。そういう要求はもともと無理である。漱石のほうから下りていって手を取ってやるほかに道はなかった。そのためには漱石は、家庭の外に向って注いでいる精力を、家庭の内に向けるほかはなかった。もしそうしていれば漱石は、実際の漱石とはかなり別のものになっていたであろう。そういう漱石が、よりよい漱石であったかどうかは別問題である。が少くとも自分の子供の内に憎悪を烙きつける父親ではなかったらうと思われる。

純一君にベルリンで逢ってから二年後に、漱石夫人の『漱石の思ひ出』が出版された。その中に漱石を一種の精神病者として取扱っている個所がある。特に烈しいのは「道草」に書かれた時期のことである。そこに並べられているいろいろな事実から判断すると、夫人の観察は正しいと考えざるを得ないであろう。しかし実際に病氣にかかったのであつたならば、「吾輩は猫である」や「道草」などは書かれるはずがないと思う。当時漱石は、世間全体が癩に障つてたまらず、そのためにからだをめちやくちやに破壊してしまった、とみずからいつている。

猛烈に癩癩を起していたことは事実である。しかしその時のことを客観的に描写し、それを分析したり批判したりすることができたということは、漱石が決して意識の常態を失っていないなかつた証拠である。それを精神病と見てしまうのは、いくらか責任回避の嫌いがある。いったいにこの『漱石の思ひ出』は、漱石を「氣違いじみた癩癩持」に仕上げたゆく最後のタッチであつたような気がする。

漱石と接触していた三年の間に、漱石と二人なりで歩いたことは、ただ一度しかない。たしか大正四年の紅

葉のころで、横浜の三溪園へ文人画を見に行つたのである。

私は大正四年の夏の初めに、大森から鵜沼へ居を移した。そのころにちょうど東京横浜間は電化されたが、鵜沼から東京へ出るには汽車のほかはなく、それも二時間近くかかったと思う。木曜日の晩に漱石山房で話にふけていれば、終列車に乗り遅れるおそれがあった。それで木曜会に出る度数は減ったが、訪ねてゆくときは、午後早く行って夕方に辞去するようにした。そのころ、門の前まで行くと、必ず人力車が一台待っていた。客間に

は滝田樗蔭がどっかと坐つて、右手で墨をすりながら、大きい字とか小さい字とか、しきりに注文を出していた。漱石はいかにも愉快そうに、言われるままに筆をふるつていた。

たぶんその関係であろうと思うが、そのころにはしきりに文人画の話が出た。いい文人画を見た記憶などを漱石はいかにも楽しそうに話した。それを聞いていて私は原三溪の収集品を見せたくなったのである。三溪の収集品は文人画ばかりでなく、古い仏画や絵巻物や宋画や琳派の作品など、尤物ゆうぶつぞろいであつたが、文人画にも大雅、

蕪村、竹田、玉堂、木米などの傑れたものがたくさんあった。あれを見たら先生はさぞ喜ぶだろうと思ったのである。

私はその話を漱石にしたように思う。そうして「それは見たいね」というふうな返事を聞いたようにも思う。しかしその点にははっきりと覚えていない。覚えているのは漱石を横浜までつれ出すにはどうしたら好かろうと苦心したことである。あらかじめ三溪園の都合をきいて、日をきめて訪ねてゆく、という方法を取るのでは、漱石はなかなか腰を上げないであろうというふうに感じた。

それで、今から考えるとまことに非常識な話であるが、十一月の中ごろのあるうららかに晴れた日に、いきなり漱石をさそい出しに行ったのである。こんな日ならば気軽に出かける気持になるであろう、出かけさえすればあとは何とかなるであろう、と思ったのである。鵜沼から牛込までさそいに行ったのであるから、漱石山房へついた時にはもう十時ごろになっていた。玄関へ出てきた漱石は、私の突飛さにちよつとあきれたような顔をしたが、気軽に同意して着替えのために引込んでいった。

今の桜木町駅のところにあつた横浜駅に着いたのは、

もう十二時過ぎであった。そのころ私は南京町のシナ料理をわりによく知っていたので、そこへ案内しようかと思っただが、しかし文人画を見せてもらおう交渉をまだしていないことがさすがに気にかかり、馬車道の近くの日盛楼という西洋料理屋へは行って、昼食をあつらえると直ぐ三溪園へ電話をかけた。ちようどその日に何か差支えでもあれば、変な結果になるわけであったが、その時には私はその点を少しも心配していなかったように思う。電話では、喜んでお待ちするとの返事であった。で私は、自分の突飛さをほとんど意識することなしに、自分の計

画の成功を喜びながら、昼食をともにしたのである。

私はその日、のりものの中や昼食の時などに、漱石とどんな話をしたかをほとんど覚えていない。ただ一つ覚えていているのは、市電で本牧へ行く途中、トンネルをぬけてしばらく行ったあたりで、高台の中腹に綺麗な紅葉に取巻かれた住宅が点在するのを眺めて、漱石が「ああ、ああいうところに住んでみたいな」と言ったことである。

三溪園の原邸では、招待して待ち受けてでもいたかのように、款待をうけた。漱石としては初めて逢う人ばかりであったが、まことに穏やかな、何のきししみをも感じ

させない応対ぶりで、そばで見ているも気持がよかった。世慣れた人のように余計なお世辞などは一つも言わなかったが、しかし好意は素直に受け容れて感謝し、感嘆すべきものは素直に感嘆し、いかにも自然な態度であった。で文人画をいくつも見せてもらっているうちに日が暮れ、晚餐を御馳走になって帰ってきたのである。

漱石は「吾輩は猫である」のなかで、金持の実業家やそれに近づいてゆくものを痛烈にやっつけている。また西園寺首相の招待を断わって新聞を賑わせた。そういうことから私たちは漱石が権門富貴に近づくことをいさぎ

よしとしない人であるように思い込んでいた。またそれが私たちにとって漱石の魅力の一つであった。しかし漱石は、いつだったかそういうことが話題になったときに、次のような意味のことを言った。相手が金持であるとか権力家であるとかということだけでそれに近づくのか回避するのは、まだこちらに邪心のある証拠である。たかめにする気持が全然なければ、相手が金持であろうと貧乏人であろうと、大臣であろうと小使であろうと、少しも変りはない。——ちようどこの言葉に現わされているような態度を、私は実際に目の前に見るように感じた。

滝田樗蔭のことで思い出したが、たぶん大正五年の春であつたと思う。木曜日の午後、樗蔭は墨をすりながら、今日は先生に大きい字を書かせるといって意気込んでいた。漱石は半切に、「人静月同照」という五字を、一行に書いた。二三枚書きつづしてから、今度はうまくいったと言つて漱石みずから満足する字ができた。樗蔭も、これはいいと言つてしばらく眺めていたが、やがて頸をかしげて、先生、この文句は変ですね、と言いだした。漱石は、変なことはないよ、いい文句じゃないか、

と答えたが、樗蔭は、いや、おかしい、と頑強に主張した。漱石は立って書斎から李白の詩集を取って来て、しきりに繰っていたが、なるほど君のいうとおりだ、「人静月同眠」だね、と言った。樗蔭は、そうでしょう、そうでなくちやならない、月同照は変ですよ。と得意だったが、漱石は、しかしそうなるまことに平凡だね、といかにも不服そうだった。樗蔭は、文句が違っていちやしようがない、さあ書きなおしてください、と新しい紙を伸べた。漱石は、君がいやなら、これは和辻君にやろう、なかなかいいじやないか、と言って、「人静月同照」

の半切を私に呉れた。私が直接漱石から貰った書は、これ一枚だけである。

私は、「人静月同照」という掛軸を今でも愛蔵している。これは漱石の晩年の心境を現わしたものだと思う。人静かにして月同じく眠るのは、単なる叙景である。人静かにして月同じく照らすということに、当時の漱石の人間に対する態度や、みずから到達しようとする理想などが、響き込んでいるように思われる。

(昭和二十五年十一月)

日本文学電子図書館

漱石の人物

著 者 和辻哲郎

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 別巻」角川書店

昭和42年10月10日5版発行

日本文学電子図書館